

障害者の定着率 100%、 無事故 100%

—九州柳河精機株式会社—

職場
ルポ

EMPLOYMENT REPORT



(文)清原れい子 (写真)小山博孝



九州柳河精機株式会社

〒869-1205 熊本県菊池郡旭志村大字川辺1106-1

TEL 0968-37-3151 FAX 0968-37-2142

ホンダのオートバイ部品を
作り続けて二十五年

熊本空港から車で約三〇分。緑が広がる中、菊池郡の川辺工業団地の一角に「九州柳河精機株式会社」がある。正門を入ると、両側にはカイヅカイブキがきれいに植栽され、緑がひととき豊かに感じられる。会社のシンボルカラーはグリーン。敷地内には合わせて七、〇〇〇本の木が植えられているそうだ。

本田技研工業株式会社熊本製作所が隣の大津町に進出したことに伴い、九州柳河精機は東京都府中市にある柳河精機と本田技研工業の合弁会社として一九七六年に操業を開始した。

まず、昨年創業二十五を迎えた会社の紹介を、代表取締役社長の河口二郎さんにうかがった。河口社長は創業者の次男として、柳河精機に入社。アメリカの



河口二郎代表取締役社長

別法人で約八年間仕事をした後、九州柳河精機に専務として入り、四年前に社長に就任した。

「『夢・情熱・行動力で未来を拓く』をモットーに掲げています。夢をもてる社会人、企業人でありたいですね。自分に厳しく、他人にやさしく、何事も自分の責任において行い、結果の責任はとれと話をしています。いままでの経営理念を引き継ぎながら、仕事以外の社会生活も含めて、夢をもてるような会社をつくって、地域も含めて共存していければと考えています」

男女差別、年齢差別など、差別に敏感なアメリカで仕事をしてきた。

「日本に帰ってきただけから、障害者も含めて、差別的なことはしたくないという気持ちがいっそう増したような気がします。一日一回は、私なりのポイントを決め、現場を回るようにしていますが、障害者と会うと声をかけるようにしています。ただ、あまり意識しすぎるのはかえって差別につながるのではないかと思います。人にやさしい職場をつくってあげたい、働きやすい職場ができるのではないのでしょうか」

玄関ロビーに、アルミホイールがずらりと並んでいる。オートバイのホイールにこんなにもたくさんの種類があるのか

と驚くほどだが、製品のごく一部だそう

だ。「我が社の製品は、世界を走り回っています。ホンダのオートバイのアルミホイールとフレームが中心ですが、地球温暖化が叫ばれている今日、アルミはリサイクルが可能ですし、鉄よりも軽いので軽量化でき、車の燃費がよく、地球を汚さずにすみます」

聴覚障害者を採用。
組立職場に配置

従業員は約五〇〇名。現在、七名の障害者が働いている。四名が聴覚障害、三名が上肢と下肢の障害がある。

障害者雇用のいきさつについて、管理部総務課長の中村総一郎さんにうかがった。中村課長は七八年に入社して、品質管理に長くかかわった後、九〇年に総務課に異動した。



中村総一郎管理部総務課長

「障害者雇用のきつかけは、法定雇用率を達成するためだったと聞いています。工場に階段や段差があり、しかもラインはほとんどが立ち作業用に設計されていますから、行政や地元のハローワークと相談して、どういう障害なら受け入れられるかを考えて、聴覚障害者を採用しました」

八二年に、地元の熊本県立熊本聾学校の卒業生一名を初めて採用した。

「その一期生が榊原です。彼がうまく仕事をやってくれましたので、翌八三年、同じく熊本聾学校から山口を採用し、八五年には、卒業生の平山が中途入社しました」

九〇年ごろから生産量が急増し、新入



榊原和喜さん（38歳・聴覚障害）は、勤続20年のベテラン



二輪用Rクランクケースカバーの組立作業をする平山健二さん（47歳・聴覚障害）

社員が年に二〇〜三〇名、中途採用者が月に一〇名も入る時代があった。そのときさらに三名の障害者が入社して、創業時から働いている下肢障害者を合わせて七名になった。身体障害の三名は、障害は重くなく、作業を行う上での支障はない。

「聴覚障害者が入社した当時、手話の勉強会をしたこともありました。職場の人たちは、簡単な手話を覚えて、あとは彼らが口の動きで理解しています。最初は苦労をしたのかもしれませんが、勤続年数がいちばん短い人で十二年、長い人は二十数年になりますから、いまは障害のある人たちに対して特別意識することはないです

ね」
四名の聴覚障害者は、組立作業に従事している。

「組立職場に配置をしていることが、配慮している点だと思っています。製造工程には、铸造、溶接、機械加工、塗装、組立がありますが、铸造では六〇〇〜七〇〇度でアルミが溶け、大型機械が動いています。機械加工ではいろいろな刃物を使い、品質を音で判断するところがけっこうあります。いろいろ検討した結果、社内ではいちばん適している職場は、組立作業ということになりました。辞めずに続いているのは、適切な職場に配置されているためだと思います」

今年三月、組織の改変が行われた。組立という仕事の内容は同じだが、所属は溶接課と組立課に変わった。

安全面にはとくに注意して

一緒に働く現場の上司にお話をうかがった。組立課長の平井正廣さんは、課長になって九年目。組立課に来て五年になる。部下に聴覚障害者二名と身体障害者が二名いる。

「手話を覚えたいという気持ちはあったのですが、勉強する機会がなかなかあ



障害者が働く職場の管理者として、指導にあたる平井正廣組立課長（右）と右田一夫溶接課長

りませんでした。聴覚障害者の二名は一般の人よりも勤がよくて、こちらが伝えようとする内容は、話す前に動作などで理解するようです。現場でわからないことがあれば書いて説明していますが、五年の付き合いがありますから、気心はわかっているつもりです。困ったこと、たいへんなことはとくにありませんし、ふつうに接しています」

天草出身の平井課長は、釣りが趣味だ。「平山は、短距離やソフトボールで活躍していて、家庭もあり、逆に自分たちが相談しなければならぬくらいです。」

上林は足が不自由ですが、明るく活発で、仕事もよくしています。個人的には家が近いので、休日には一緒に釣りに出かけたります」

溶接課長の右田一夫さんの下には、聴覚障害の山口和洋さん、信弘さん兄弟が働いている。弟が先に入社し、兄が後から転職した。右田さんは課長になって二年目。二人の上司となつてからは数ヶ月だが、以前の組立の職場からの知り合いだ。

「最初は、この単語は手話ではどう表現するのかと聞いて教えてもらっていましたが、最近はその動きでだいたい話が通じますね。彼らが首をかしげたときは書いています」

二人が上司としてとくに注意を払っているのは、安全について。音で判断する機器はパトライトの光に変え、目で判断できるように、また危険な場合は、音の代わりに光で知らせるようにしている。

安全衛生委員を務める平井課長は、エンジン部品組立に従事している平山さんがより安全に作業ができ



独自に開発した自動タイヤはめ機を操作して作業を進める山口和洋さん（40歳・聴覚障害、写真右）と弟の信弘さん（38歳・聴覚障害）



るようにと、補助具を試作中だ。

「安全と品質に関しては、朝礼などで全員に話し続けていますが、とくに安全面に関しては一般の人たちよりも注意しなければいけないと思っています。聴覚障害の人たちは、仕事を任せる上で最初は大丈夫かなと心配だったので、日増しに身近な存在と思えるようになり、

何かあれば『このことは特別に注意しておこう』と思ったりしています」

総務課と組立課と溶接課の課長で障害者職場定着推進チームをつくっているが、いまのところ出番はないそうだ。

「職場の雰囲気が悪くないから、定着しているのではないかと思います。休み時間など、ワイワイやりながら仲良くやっていますよ」

スポーツや趣味を 楽しみ、会社に満足

本人たちからもお話をうかがった。組立課の三人に話を聞くことができた。聴覚障害の二人とは筆談で。平山健二さんの現在の職場はエンジン部品の組立。エンジンカバーの圧漏れの検査を機械で行っている。平井課長が安全面での配慮をさらに考えている部署だ。

「仕事はたいへんではありません。以前は生活がたいへんでしたが、こちらに来てからは楽になりました」

進出企業は地場企業より待遇がいい。平山さんは、スポーツが得意。九九年のハートフルくまもと大会の陸上男子一〇〇メートルと二〇〇メートルともに大会新記録で優勝した。今年のよさこいピック高知大会では一〇〇メートルと走



九州柳河精機でつくられるホイールや各種オートバイ用の部品

り幅跳びで金メダルをねらっている。ただ、最終工程の組立の部署は残業が多い。「平日は残業があり、練習の時間がなかなかとれません。でも、これからも金メダルをたくさんとりたいです」

第一期生の榊原和喜さんはベテランの作業者だ。

「仕事は忙しく、残業がありますが、むずかしくはありません。職場の人たち



も親切です。休日には、自転車で温泉巡りをしています。熊本県内のお勧めの温泉は菊池温泉です」

平井課長とは長年一緒に、気心は知れている。

上林正美さんは交通事故で下肢障害に。途中入社して十三年目。オートバイの足回り、ブレーキ関係の担当で、熟練が必要とされる作業をこなしている。



ハブの組立を担当する上林正美さん（48歳・下肢障害）

**厳しい環境を
生き抜く企業に**

「会社には満足しています。以前は大工をしていましたから、休日が一定していませんでした。休日がとれるようになって、釣りの趣味が復活しました」
休日には、平井課長と天草に釣りに出かける。

障害者全員が熊本県の出身で、これまで退職者は一人もいない。創業時から働いている下肢障害者は班長になっているが、新たに障害者を採用するのはむずかしい状況だという。



組立課で活躍する森松利行さん（43歳・上肢障害）

「新しい仕事に移るのはたいへんだという思いもあるかもしれませんが、障害者の定着がいいのは、仕事が合っていることと、職場の雰囲気がいいからだと思います。定着率は一〇〇%です。ここ二〜三年は従業員の定着もいいですね。今年春は初めて新卒者の採用がゼロでした。従業員の雇用が再開されないと、障害者の雇用も再開できません」と中村課長。

納品先の本田技研工業熊本製作所は五〇CCから一二五CCの小型スクーターを製作し、国内に販売し海外にも輸出してきた。業績は順調に伸びてきたが、このところ二輪車の販売は伸び悩み、ホンダが中国で小型スクーターの現地生産を開始するなど、環境は厳しくなっている。

「十年前は年間二二〇万台を生産していましたが、いまは五五〜五六万台。今期は四〇万台になりそうですから、厳しいですね。これからは、大型バイクのフレーム部品、エンジン部品の生産をふやしていこうとしているところです」

九州柳河精機は、ホンダとともに歩んできた。社員はほとんどがホンダ車を愛用。他社の車に乗っている人は、駐車場が遠くなるのだそうだ。河口社長は、

「自動車産業は、中国の台頭が激しいんです。研究開発に力を注いでいますが、海外にシフトしていくスピードのほうが速くて、日本の製造業の空洞化が食い止められないというジレンマがあります。中国とアメリカに合弁会社がありますが、日本経済の厳しい状況の中、世界の市場で戦っていける企業づくりをめざして努力していきたいですね」

取材の数日前、「ホンダのコピー商品を作っていた中国の工場で、小型スクーターの製造を開始した」というニュースを聞いていた。取材先がまさに影響を受けているところだったとは――。日本の製造業が元気になるしないと、障害者雇用もままならないという現実を思い知らされた一日だった。